
初恋

後藤詩門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

初恋

【Nコード】

N7133E

【作者名】

後藤詩門

【あらすじ】

矢神翔太が幼き日に出会った女の子。それは彼の初恋。だけど彼女はいったい……誰なんだ？

第一章 （前書き）

夏ホラー2008、百物語編投稿作品です。淡い初恋の思い出が恐怖の体験となつてかえってくる、静かなホラー。どうぞご覧ください。

第一章

さっきまで猛烈な暑気を振りまいていた太陽は、厚い雲に覆われてすっかり姿を隠し、代わりに大粒の雨が焼けた大地を叩き始めていた。

夕立である。

真っ黒なアスファルトは水しぶきをうけ白く煙り、時おり鳴り響く雷が暗い街中を明るく照らす。まさに恵みの雨。

気温にして4度は下がっただろう。時折吹く風が何とも涼しげになる。

そして八神翔太^{やがみしょうた}のいる病室にも、開け放たれた窓からその涼風が舞い込んできた。

「わあ、いい風だねえ、お兄ちゃん」

翔太の妹、八神明菜^{やがみあきな}がベッド脇の丸イスに座りながら嬉しそうに言った。大学生の彼女はとつくの昔に夏休みに入っている。

「あのなあ明菜、別に窓なんか開けなくても……エアコンを入れれば涼しくなるだろう？」

天井を見上げるように寝ころんだまま、翔太が口を尖らせて不満を呟く。

この夏日にエアコン無しで過ごすなんて。病院のベッドでじっと寝ているしかない彼にとっては地獄のような環境であつた。

「だってえ、私エアコンの風って苦手なんだもん。それくらい知ってるでしょう、お兄ちゃん」

明菜がさも当然とばかりに言う。もちろん翔太は知っていた。これまで父親代わりとして、そして時には母親代わりとして彼女の面倒をみてきたのだ。妹の性格などお見通しである。

我がままで気まぐれで甘えん坊。ショートカットの髪型からも分かるように、元気はつらつな娘である。そして、怪我をして入院している兄の面倒を見るため、夏休み返上で看病してくれる優しい子でもあった。

「けどなあ、こんな時くらいは俺に合わせてくれよ。見ろ、暑くて死にそうだ」

そう言つて翔太は宙吊りにされた自分の両足を指さした。哀れにも、膝から下を石膏で固められトイレに行くのもままならない状態。骨折であった。

「ダメ、私がここにいるからにはエアコンはつけさせません。お兄ちゃんの骨折は自業自得でしょ！それに私は夏休み返上で看病してあげてるんだからね。感謝してほしいくらいよ」

とりつく島もなく妹が答えた。まったくこの妹には叶わないな、と翔太は苦笑いを浮かべる。

でも、確かにこの骨折は自業自得。言い訳のしようがない。

そもそも何故こんな事になったのか？
簡単に言えば交通事故が原因である。趣味で乗ってる大型バイクで転んでしまったのだ。

なんの変哲もない見晴らしの良い一本道。天候は快晴、人通りすらない。そんな所でいきなり横転してしまった。そして自爆、全治3ヶ月の重傷であった。

訳が分からない。素人でもなければ、運動神経だって悪くないのに……

だが翔太にとってはこんなこと日常茶飯事なのである。

実は子供の頃から摩訶不思議な怪我や病気で何度も入退院を繰り返してきた。

それこそ、まだ両親が生きていた頃は毎年のように。

そして、そのたびにここ海南総合病院にお世話になっている。まるで悪いモノでも憑いているみたいだ……

だが、その時。そんな兄の思索を打ち破るかのような、素っ頓狂な声が聞こえてきた。

「あつ、そうだ！　ねえねえ、お兄ちゃん。ここで私もお兄ちゃんも産まれたんだよね？」

「ああ、そうだよ」

「じゃあ、じゃあ……お兄ちゃんの初恋の人に会ったのもここだったんじゃない？」

いたずらっぽい笑みを浮かべて妹が兄の顔を覗き込む。

以前、翔太に聞かされた不思議な恋の話。明菜は何となく覚えていたのだ。

「ねえ、話してよう。お兄ちゃんの奇妙な恋バナ！」

興味津々の明菜に兄は渋々うなずいた。我が儘が服を着たような娘だ。かなうわけない。

「分かったよ、だけど途中で笑うな」

「もち、笑わないって」

調子の良い明菜の返事に兄は話し始めた。

翔太の初恋、それは彼がまだ4歳だった頃の話。

あの日、彼は生まれて初めて一目惚れというものを経験した。人が聞けば、ずいぶんおませな子供だなあと感じるだろう。

無理もない、翔太自身もそう思う。まさか、まだ幼稚園にも行っていない鼻たれ小僧が恋なんて……

だけど、これだけははっきりと言える。彼は確かにあの日恋に落ちたのだ。

「いや、正確に言えば恋とは少し違ったのかもしれないよ。だけど、それによく似た感情だったのは間違いない」

「へえ、4歳の子供がねえ」

さっそくさっきの約束を反故にしたかのような茶化した妹の声にもめげず、真面目な顔で兄は続ける。

「それはまるで、昔無くした大切な何かが戻ってきた時のような、そんなノスタルジックな感じがする出会いだっただよ」

そして、子供心にこの子は特別な人なんだとすぐ理解できたほどの衝撃的な邂逅でもあった。

「彼女と初めて出会ったのはこの病院の中だ。いや初めてもなにも、あの子と出会うのはいつもここなんだけど……」

「いつもって、お兄ちゃん、その人と何回くらい会ったんだっけ？」

「うーん、確か中学に入る前までは毎年会ってたなあ」

「ずいぶん長いこと入院している子なんだね？」

「そうだなあ、もしかすると病院関係者のお子さんかもな」

「そっか、その線もあるか」

明菜が名探偵よろしく、細い顎を撫でながら何度も頷く。

幸か不幸か彼女はあまり頭が良くない。だからこんなときは兄として面目躍如となる。

「で、それからどうしたの？」

「ああ、それから……」

翔太はその日、父親に連れられて母親が入院しているここ、海南総合病院にいた。母親の入院は妹、明菜の出産のため。そして彼らはそのお見舞いである。

「ひどく退屈だったのを今でも覚えているよ。生まれたばかりの前は、ガラス張りの新生児室の中だろ。4歳児の僕に触れさせてくれるはずもないし、僕はただ猿みたいに赤ら顔のお前を遠目に眺めてただけ。あとは母さんの病室で大人しく四方山話よもやまでもするしかなかったんだ」

「あつ、ひつどーい！ 赤ら顔の猿ってなによ？ こんなかawaii

「妹をつかまえてさ」

「仕方ないだろ、客観的な事実だ。それに産まれたばかりの赤ん坊なんてみんなそうなんだよ」

翔太は怒れる妹を何とか言いくるめ先を続ける。

「わんぱく盛りの4歳児には退屈な時間だった。いやむしろ、それは拷問に近い感覚だったな。そんな絶望的に暇を持て余していた僕が、病院の中を探検したいと考えたのも当然のことだと思わないか？」

「うーん、確かに私も退屈なのは苦手かも。それでどうしたの？」

「すぐに僕は父さんをお願いしたんだ。すると意外なことに、すんなりOKしてくれた。退屈で死にそうな僕を哀れに思ってくれたんだろうね」

父親の職業は地方公務員である。超がつくほどの頑固者であったが、優しい一面も持ちあわせる良きパパでもあった。

「あの時、父さんは“危ない所には行くんじゃないぞ”って言うてくれた。僕は“うん、分かってる”って答えたんだ」

「お父さん……優しいね」

明菜が感激して少し涙目になる。

彼女には父親の思い出があまりない。小学6年生の時、突然の病で父親を亡くしたのだ。

翔太が高校生の頃である。

だから、兄から父親の話しを聞くとついこうなってしまう。
そんな妹を優しく眺めながら兄は続きを話した。

「そんなやり取りを父さんと交わした後、僕は母さんの病室を飛び出していた。何か素敵な事が起こりそうで、期待に胸を膨らませていたよ。大きな病院だからねえ。お前も分かるだろ？　ここは大人でも迷子になるくらい、かなり大きな建物だ。あの頃の僕には巨大な迷路のように映ったよ。歩くだけでワクワクドキドキが止まらなかった。しかも、身内に入院患がいる特権で、僕は普通の外来なら絶対に入れないような場所にも出入りできた。まあ、本当は入っちゃいけなかったんだろうけどね」

いたずらっぽく軽くウインクする兄に、明菜も笑いながら答える。

「ああ、いけないんだあ、お兄ちゃん。で、どうなったの？」

「うん、そして僕が探検の末にたどり着いたのが病院の地下にある奇妙な部屋だった。そこは本当に不思議な場所だね。窓は一つもないし、部屋中に本棚が並んでいた。まるで図書館みたいに。だけど、そこには本と呼べる存在は一冊も無いんだ。代わりにあるのは何だと思う？　それはね、色んな形の瓶だよ。そう、ガラス製のあの透明な……ジャムや蜂蜜なんかを入れるあの瓶だ。その部屋にある瓶はもつと大きかったんだけど、それが木製の棚に行儀よく並んでいた。そして、その瓶の中身なんだけどね……これが曲者でなあ」

「ええつ、何、何、何だろう？」

もったいぶった翔太の言葉に、妹の明菜が続きを急かす。一方、兄はこれから起こるであろう彼女の反応を予測して、密かに胸を高鳴らせていた。

その中に入っていたものの、それは当時の彼が見たことも聞いたこともない得体のしれない物体。

「確かあの時、僕はこう言ったんだ。“わぁ、水族館みたい。お魚がいっぱいだあ”ってね」

「水族館？ お魚？ 病院にそんなものあるのかなぁ」

不思議そうに首を傾げる妹に翔太はにやりと笑う。
実際、それは魚に見えなくもないものだ。だが、今なら分かる。
それは決して魚などではない。それは……

「それはね、フォルマリン漬けにされた人間なんだよ」

「ええっ人間？ 嫌だぁ、気持ち悪い！」

しゃがみ込んで耳を塞ぐ妹の明菜。予想通りの反応だった。彼女はこの手の話に極端に弱い。

そんな明菜の様子に思わず吹き出してしまう翔太。
彼は、いつも我がままでお姫様のように振る舞うこの妹が、こんな時に見せる弱々しい姿が大好きだった。
ちよつとSっ気があるのかもな、と自嘲気味に呟く。

だが、これも本当の話だから仕方ない。人間の内臓や胎児、それが瓶の中身の答えなのだ。

例えばその中には、癌になった肺とか機能が衰えた肝臓などが入っていた記憶がある。

さらには墮胎された胎児や出産の時に死んでしまった未熟児たち、そして珍しい奇形児なども含まれていた。

それらは一見すると変な魚に見えなくもない。特に墮胎された胎

兇なんかは……少なくともあの時の自分にはそう映った。

薄暗い室内で、スーパーの売り場のようにきちんと陳列された肉、肉、肉の塊。

そのサーモンピンクの肉片が幼い翔太には何だかおかしくて、最高に楽しかったのだ。

「それって絶対に変だよお兄ちゃん！ 異常だよ、そんな子供」

泣きそうな顔で叫ぶ妹に言われるまでもなく、今なら翔太にも不気味な思い出だ。

普通なら逃げ出すシチュエーションだろう。だけど……

凄い、凄い、凄い！ と当時の彼は興奮して叫んでいた。先入観のない子供には、人間の死体といえども怖くなんかない。むしろそこは、彼にとって初めて見るテーマパークにも劣らない夢の遊園地。

逃げ出すどころか、何して遊ぶ？ などと考えていた。だが、その時である。

「はしゃぐ僕の視界にね、突如、人影が飛び込んできたんだ。ささっ、とね」

「ええっ、人影え？ もう怖い、怖い、お兄ちゃん。もう言いよう、その話は！」

「まあ、待て。もう少しで終わるからさ」

パニクる妹をなだめ、にこやかな顔で兄は続ける。

「たくさんの死体に囲まれた中だろう？ 常識的に考えれば幽霊が何かだと思っよな。悲鳴の一つも上げて部屋から飛び出すところだけど、あの時の僕はそうはしなかった。いやそれどころか、その人影をまじまじと観察したんだ。それは誰かだっ？ そう、それが……彼女なんだよ」

「彼女？ 初恋の？ ひょっとして……幽霊？」

「いやいや、幽霊じゃないさ」

恐る恐る尋ねる妹に、兄は安心させるかのように強く否定する。
これ以上怖がらせると明菜は家に帰ってしまうかもしれないからだ。それは困る。

それで翔太は、なるべく明るくこう言った。

「それが、僕の初恋の人。運命の女の子だったんだよ、明菜。笑った時のえくぼが可愛い、長い黒髪の少女だった」

それ以来……翔太は何度も彼女に会いに行ったのだ。彼が入院する度に。

そして彼女は、いつもその部屋にいた。

第二章

八神翔太と明菜は例の地下室にいた。

「うわあ、やっぱり気味の悪い所だねえ、お兄ちゃん」

「まあなあ……でも少し雰囲気変わったような気もする。模様替えでもしたかな？」

何故こんな所にいるのか？ もちろん翔太が頼んだのだ。

妹に初恋の昔話をしているうちに、どうしてもあのフォルマリン漬けの瓶が並ぶ思い出の部屋へ行きたくなった。

そして今、彼は明菜に押してきてもらった車椅子に座り、その懐かしの部屋を見回しているのだ。

多少……瓶の並びなど変わった所もあるようだが、この部屋はほぼ当時のまま。

たくさんの瓶にフォルマリンの匂い。やっぱり昔のままだ。薄暗い室内もまた当時と同じ。

「おおつ、懐かしい。思い出すよ、我が少年時代を」

兄が車椅子の上で体をねじり妹の方を振り返る。満面に笑みをたたえていた。

こんな時、翔太の頬には女の子みたいなえくぼができる。本当に嬉しそうだ。

陰気な地下の標本室に付き合わされて、ご機嫌斜めの妹であったが、こんな兄の笑顔を見ると何だかこっちまで楽しくなってくる。

まるで少年みたいな笑い顔。思わず明菜の口元からも白いものが見えた。

そういえば一昨年、突然癌で亡くなった母親もこんなえくぼをつくっていたっけ、と明菜は思い出していた。

少しうらやましいなと思う。残念ながら彼女は父親似。どんなに笑ってもえくぼどころか、痘痕あばたすらできない。

まあ、実際に痘痕なんかできたら、それはそれでさぞ困るだろうけど……

「明菜、あそこだよ。彼女がいつも立っていた場所は」

嬉しそうに翔太が指さすのは部屋の真ん中に据えられた本棚。そこには珍しい奇形の胎児たちがフォルマリン漬けにされて並んでいる。

彼女にとってはこの地下室の中でも一際気持ち悪い場所だ。なるべく視線を合わせないように努力する明菜。

だがそんな妹の思いとは裏腹に、兄は思い出の場所に上機嫌だ。

「あの子は、いつもあそこに立っていたんだよ。僕らは会った瞬間から仲が良くてね。時間を忘れて長いことこの部屋で遊んだんだ」

「へえ、変わってるわよねえ。こんな気味悪い所で遊べるなんて」

「まあ、子供の頃はちよつとグロテスクなものに惹かれるものさ」

「だからあ、それは特殊なんだって。お兄ちゃんもその彼女も絶対変だよ。って……あれ？ そう言えばお兄ちゃん、私まだその彼女さんの名前聞いてないや。なんて人？」

「ああ、名前？　それがなあ……」

妹の質問を聞いて、翔太は口元に皮肉な笑みをたたえていた。そして嫌味たっぷりにこう言う。

「なんと驚くなかれ、彼女はなあ……お前と同じ名前なんだよ。あきなって言うんだ。漢字は聞いてないから分からないけど、お前と同じ発音のあきな。ちよつとショックだよなあ」

「ええつ、うそう？　本当に偶然だねえ。でも……なんでショックなのよ！」

ようやく兄の冷やかしに気づいた明菜。一方、翔太は車椅子に座りながらわざとらしく肩をすくめた。

「だってさあ、彼女とお前じゃあ何て言うか……お淑やかさが全然違うんだもん。彼女のお陰で俺的には、あきなって名前は大和撫子のイメージなんだ。でも、お前はどっちゃかっていうと……日本武尊^{やまとたける}の方だろ？」

「なによ、その言い方。まるで私がお淑やかじゃないみたいじゃない！　分かりました。じゃあ、大和撫子じゃない私は足の悪い兄をここに置いて、さつさと帰るとしましょうか？　文句ないわよね」

「お、おい、冗談だよ。冗談。こんな薄気味悪い所に置いていくなよ」

「あら、平気だって言ってたじゃない？」

「あれは子供の頃の話だから……勘弁してくれ」

仲の良い兄と妹がよくする、ぬるい兄弟喧嘩だった。案の定、しばらくするとどちらからともなく笑い声が沸き起こる。

おかしくて仕方ないといった感じ。

すぐに仲直りして、これでおしまい……のはずだった。

だが、その時である。

この二人の仲に割り込むかのような出来事が起こった。棚の向こうでささつと何かが動いたのだ。

薄暗い室内である。よくは見えないが確かに何かいる。

翔太にはそれが人影のように思えた。

何故か昔からこの部屋には蛍光灯がない。白熱灯がわずかに二つ、淡い光を灯しているだけ。

薄暗い室内でよく目をこらす翔太。視界の端では、まだ人影は動いていた。

前にもこんな事があった気もするな、と翔太は感じていた。

何だろ？ このデジャブな感じは……

奇妙な懐かしさを感じていた翔太だったが、明菜はまだ気づいていない。

「どしたの、お兄ちゃん？」

「しっ、明菜！」

口到人差し指を立て黙るように合図する翔太。ついでに目配せして部屋の奥に妹の注意を向けさせた。あそこに誰かいるぞ、とその目は語る。

翔太はすばやく頭を巡らせていた。謎の人影についてである。

（確かに誰かいる。誰だろ？ 病院の人ならいいけど。もし、幽霊だったりしたら……どうしよう？）

さすがの翔太も、大人の今はお化けは怖い。ましてや場所が場所に恐怖は倍増する。

「ね、ねえ……お兄ちゃん、誰かいるの？」

震える声で尋ねる妹に、兄はうなずく事で肯定した。明菜もやはり怖がっているようだ。ここは兄たる自分がしっかりしなければ。翔太は勇気を出して、少し大きな声でこう言った。

「あの、そこにいるのは誰ですか？」

部屋の最奥、その壁際の棚あたりを凝視する翔太。ゴクリと生唾を呑み込む。

人影が淡い光に照らされて再び動いた。そして、ゆっくりと彼の前に姿をあらわす。

はたしてそれは……女性であった。

フォルマリン漬けの瓶の影から現れた人影は、二十代くらいの若い女性だったのだ。

（違った、幽霊じゃない）

ほっとする翔太。

しかし、こんな所にいるこの人はいったい誰なんだろう？

（うーん、病院関係者には見えないよなあ）

彼女は涼しげな水色のワンピースを身に着けている。白衣でもナース服でもない。どうみても一般人の格好だ。

ここ海南総合病院常連の翔太は、上は院長から下は掃除のおばさんまで顔なじみ。この女性は知らない人だ。だけど、どこか懐かしい感じもする……

翔太は突然現れた彼女の様子をそれとなく観察した。

腰まで伸ばした長い黒髪は艶やかで、淡い光に照らされ幻想的な輝きを放っている。

そして、微笑みを絶やさないその表情は何ともいえずチャーミングである。

しかも一番目を引くのは、その両頬にある可愛いえくぼ。心の底から美しいと翔太は感じた。そしてまた、懐かしさが胸の内でこみあがる。

まさに彼が理想とする清楚な美人。この人には何処かで会った。いつたい何処で？

「あ、あれえ、そういえば！ ひょっとして……あきなちゃん？」

翔太が叫んだ。

確かに面影がある。

すると……

あきなと呼ばれた女性がほほを赤く染め、はにかみながら深くうなずいたのだ。

間違いない。翔太の初恋の人である。小学校の6年生以来の再会であった。

「あはあ、懐かしいねえ……元気だった？」

あきなはやはり嬉しそうにうなずく。

翔太はもう有頂天である。初恋の人、憧れの彼女にまた出会えた！
こんなに嬉しいことはない。翔太にとっては人生最高の瞬間。

「あつ、そうだ！ 妹を紹介するよ。明菜、こちら俺の幼友達のあきなさん。あの、あきなさん。これ俺の妹の明菜。名前、おんなじなんだよ。偶然でしょ？……って、あれ？」

車椅子に座りながら初恋の彼女と妹を交互に見比べながら話していた翔太だったが、何かがおかしいと気づく。

そう、妹の様子が変なのだ。さつきから黙り込んで翔太を見ている。

何か気味の悪いものでも見ているかのように……

「どうした明菜。黙り込んでじゃって？」

兄の言葉に急に我に返る妹。その瞳には怯えの色が浮かんでいた。

「お兄ちゃん……いったい誰と話してるの？」

想像もしないセリフが明菜の口から飛び出してくる。一瞬、ぎくりとする兄。

「だ、誰って……あきなさんだよ。ははっ、おかしいこと言っなあ」

「あきなさん……てどこにいるの？」

妹の明菜はただの一度も翔太の初恋の人を見ようとはしなかった。

ただ、虚ろな目で辺りを見回すと、再び兄に視線を合わせてこう言う。

「あきなさんなんて……どこにもいないよ、お兄ちゃん！」

「ええっ？」

驚きであった。あきなは確かに翔太の目の前にいる。

この圧倒的な現実感には幻などでは決してない。なのに明菜には見えていないという。

もしかして、からかっているのか？

翔太が不審の眼差しを妹に向ける。

だが、その兄の疑いの目を明菜は別の意味に捉えた。

（どうしよう、お兄ちゃんがおかしくなっちゃった！）

無理もない。彼女には翔太が見えていると主張するものが、何一つ見えてこないのだから。さつきから兄が話しかけているその先には、大きな瓶が一つ鎮座する新しい本棚しかない。

そして、その大きな瓶の中身はというと……頭のない胎児のフォルマリン漬けなのだ！

なんともグロテスクな光景である。

その頭のない胎児に向かって兄は親しげに話しかけていたのだ。明菜でなくとも気味悪く思うだろう。

明菜は急に怖くなってきた。ここから急いで逃げないといけない。彼女の第六感がそう告げる。

心臓が早鐘のように鳴り響き、汗が滝のように吹き出す。急がないと

「お兄ちゃん、は、早く出ようよ！」

「あ、ああ……だけどせつかくあきなさんに会えたのに」

戸惑う翔太を叱りつけるように明菜が叫ぶ。

「あきなさんなんかどこにもいないよ！ とにかく出るからね、お兄ちゃん！」

妹はぐつと力を入れて兄の車椅子を180度回転させた。

そして、出口に向かって猛ダッシュする。

急がないと……その一心で。

一方、兄は豹変した妹にただただ驚いている。いったい何があったんだ？

だが、とにかくここは彼女に従う他ない。

翔太は車椅子の上で何とか後ろを振り返ると、あきなに別れの挨拶を送ろうとする。

しかし、それはできなかった。

いや、別れどころか何と初恋の人あきなが猛烈な勢いで二人のあとを追いかけていたのだ。

その表情は今までの彼女とは大きく異なり、おそろしく歪んでいる。初めてみるような顔だった。まさに……鬼の形相。

その姿に翔太は初めて恐怖を感じた。

「あきなさん、また来るから。また来るから追いかけないで。頼む、頼むよ、あきなさん！」

必死の翔太の懇願。だが、あきなは聞く耳を持たない。

髪を振り乱し、一心不乱に駆け寄ってくる。

そして、翔太と明菜が部屋を出る前にあっさり二人に追いついた。それから、翔太の初恋の人あきなが車椅子を押す明菜の肩に手をかけた。ひやりとした感触が伝わってくる。その時だ！

「きゃあーーーーー」

この世のものとは思えないような叫び声が部屋中に轟いた。それは妹、明菜の声。

車椅子の上で振り向く翔太。彼の目に飛び込んできたのは……硬直した顔で崩れ落ちていく妹の姿だった。

いつの間にか、あきなの姿は霧散して消えている。

ドサリと鈍い音が響き、軽い衝撃がコンクリートの冷たい床から翔太の車椅子に伝わってきた。

明菜は気絶してしまったのだ。

「明菜、どうした、しっかりしろ！　しっかりするんだ明菜！」

翔太の虚しい叫び声だけが、海南総合病院の地下の部屋に響く。だが、どんなに呼びかけても明菜はおきようとはしなかった。

こんこんと、ただ眠り続けている。

外ではあれほど激しかった夕立がピタリとやみ、静寂があたりを包む。陽はすっかり傾き、夜空には星が瞬き始めている。

そんな中、ただひぐらしだけが消えそうな声で鳴いていた。

聞く人の耳にその声は……まるで悲しみにくれる女性のすすり泣きのように聞こえたという。

第三章

妹の明菜が気を失ってから3ヶ月が過ぎた。

今日は両足を骨折して入院していた翔太の退院の日である。すっかり板についた入院生活ともお別れ。

そんなわけで彼は今、海南総合病院の院長室に挨拶をするため出向いていた。

「やあ、やっと治ったかあ翔太君。退院おめでとー」

「はい、ありがとうございます。院長先生」

好々爺然とした病院長の田中が、相好を崩して喜んでくれている。ありがたいものだ。翔太は思う。実は翔太が産まれる時、赤ちゃんの彼を取り上げてくれたのが田中なのだ。院長としても翔太には特別な思い入れがあるのだろう。

「せっかく来たんだ。少しゆつくりしていきなさい」

などと言うとお茶と茶菓子を出してくれた。この申し出を翔太は快く応じることにする。

のんびりと一口、緑茶をすすする二人。しばらくは世間話に花を咲かせていたが、自然と会話の流れはあの事になる。

「それにしても……今回は大変だったねえ翔太君」

しみじみと語る老人の瞳には心からの気遣いがあった。妹、明菜のことである。

「どうもすみません院長先生。僕だけじゃなくて妹までご迷惑をおかけしまして」

「何を言ってるんだ水くさい。明菜ちゃんの事は任せておきなさい。それに私と君は長い付き合いじゃないか。遠慮なんかせず困った時はいつでも言いなさいよ」

その言葉に、ついつい目頭を熱くする翔太。嬉しかった。この3ヶ月もの間、一回も目覚めなかった妹を心底心配していたのだ。

これまでは同じ病院の中、彼もちよくちよく見舞いにこれた。しかし、明日からは仕事が始まる。

ただでさえ骨折治療で長期休暇をとった後である。妹の見舞いのためにそう何度も会社を休むことはできない。それが気が気ではなかった。

正直、院長の言葉に救われた気がする。

「お願いします、先生！」

深々と頭を下げる青年に、老人はにこやかな笑顔でうなずいた。

「ああ、任せたまえ」

そして翔太の肩にその手を伸ばし、ポンと一つ軽く叩く。

しわがれた院長の瘦せた手が、翔太には何だか重たく感じる。大丈夫。早くに両親は亡くしたが、俺にはこんなに親身になってくれる人がいる。大丈夫だ。そんな安心感を与える重みであった。

だが、そんな翔太の心の支えになる院長ではあったが、彼自身まったく不安が無いわけではない。

むしろ、これから明菜をどう治療してよいか迷いがあつた。

なぜなら彼女はまったくの健康体だったからだ。精密検査でも異常無し。ただ目が覚めないだけというだけの状態。手詰まりである。

それに加え彼には気になる事が、彼女がこうなるきっかけになった話だ。

翔太から事故の状況を詳しく聞いた時には、一笑に付した幽霊話だが、思い返せば心当たりが田中にはある。

恐らく翔太には……いや絶対彼には話しておかなければならないな、と老人は考えていた。

ちようど良い機会だ。今話そう。だが、この青年がその話をどうとらえるのか……それだけが気がりである。

「実はねえ、明菜ちゃんが気絶したきっかけを作った女性の事なんだけどね」

そう切り出してきた院長の言葉に翔太は思わず苦笑する。

明菜がこうなったきっかけ、つまり翔太の初恋の人あきなの事であろつ。

あれから何度も考えたが、彼女は確かにあそこにいた。あれは見間違えなんかじゃない。

でも、病院内の医師もナースも誰一人信じてくれないのだ。院長とて同じだと翔太は感じていた。

まあ致し方ないと思う。彼らは医者のみならず科学者でもあるからだ。

超常現象には抵抗があるのだろう。

それでも、彼女は確かにあそこにいた。翔太はそれを確かめるべ

く、妹が倒れて以来何度となくあの地下室へ足を運んだ。

残念ながらあきなの姿は影も形もない。病院関係者に聞いてもそんな人間はここにはいないし、そんな家族友人も来ていないのと。

これ以上、翔太には調べようがない。

だが……事実なのだ！

「先生、確かに突拍子もない話に聞こえるでしょう。馬鹿にしたい気持ちも分かります。でもね、あれは本当なんですよ」

なかなか信じてもらえないもどかしさに、悲痛な表情を浮かべる翔太。だが、院長は意外にも手を振ってこう答える。

「そんなことないよ翔太君。いや、最初は信じられなかったさ。君の目の錯覚だろうとも考えた。でもね……あの地下の標本室の事で思い出した事があるんだ」

急に深刻そうな面もちで語りだした院長に、翔太は身を乗り出していった。いったい何を思い出したのだろう？

固唾をのんで見守る。

「実はね、あそこには君の……お姉さんがいたんだよ！」

「ええっ、姉さんですって？」

「ああ、双子のね」

「ふ、双子？」

意外な展開である。これまで一度も聞いた事のない話だ。もちろ

ん、父親からも母親からも……

「驚くのも無理はない。そして何故隠していたのか疑問に思うだろう。それには理由があるのだ」

それから、田中はポツリポツリと語り始めた。

実は翔太は双子、それも結合双生児であつたという。別名シャム双生児。

20万組に1組という確率でおきる奇形児で、日本ではベトナム人のベトちゃんドクちゃんが有名だろう。

双子の体の一部が結合して産まれるからこの呼び名がある。時には下半身を共有する双子や、あるいは胸だけが繋がった双子などパターンは様々。

「君らの場合、残念なことに頭が繋がっていた……つまり、脳が一つしかない双子だつたんだ」

「頭が繋がった？」

信じられないといった表情の翔太。

話す院長の方も、いかにも残念だとばかりに唇を噛む。

「本当なら君たち二人とも助けたかつた。でもね……結合双生児の寿命は短い。しかも頭が繋がっているなど、もって数年の命だと思えた。私は率直に君のご両親に言つたんだ。どちらか一人を選んで一つの脳を与え、どちらか一人は殺すしかない」と

ショックだつた。続きは聞かなくとも想像できる。翔太の両親は翔太を選んだのだ。

「君のご両親は大変悩み苦しんだよ。当然だ。初めて授かった子供。どちらも可愛くないはずがない。君のお父様にいたっては、もう君たち二人の名前まで考えていたのだからね」

「……そうですか」

「決めたのはやはり、お父様だったよ」

ポツリと田中は言った。瞼の裏にあの時の情景が鮮明に蘇る。

泣き叫ぶ母親がどちらも助けて下さいと懇願し、最後は自分の脳を子供に移植して欲しいとまで言ってきた。

だが、そんなこと出来るはずもないし、出来たとしても倫理上問題のある行為。つまりは不可能だった。

結局、父親の希望が優先され……矢神家の跡取り息子が一つしかない脳を得たのである。

「そうだったんですか」

ため息が思わず漏れる。こんな事情があつたのなら、両親も話しくいはずだ。今にして思えば何となく両親は、翔太の出産の話をしたがらないような気もしていた。そういうことかと合点がいく。しかし……

「このことと、妹のことには何の関係があるんですか？」

翔太はふとそんな疑問を口にした。だがすぐその後で、はたと膝を打つ。

大切な事に気がついたのだ。

「ひょっとして、あの部屋にあつた標本の胎児……？」

「そうなんだよ翔太君。あのフォルマリン漬けにされた胎児たちの中に君のお姉さんはいたんだ」

「な、なんてことだ」

翔太は絶句した。双子の姉がそんな変わり果てた姿になっていたなんて。だんだん腹がたってくる。

「酷いですよ院長先生！ どうして姉さんを標本なんかにしたんですか？」

「本当に、すまない」

田中は素直に頭を下げた。翔太の心情はよく分かるし、負い目もある。心から詫びた。

「君の両親はこのこと……つまり結合双生児が産まれた事も、手術の事も内密にしてくれと頼んできたんだ。まあ、気持ちは分かるよ。あの頃は世間体というものが今よりずっと重かった時代だからね。でも、医師としては残念でもあったんだ」

「それは……どうしてですか？」

「それはね」

少し考えてから海南総合病院院長は重々しくこう言った。

「史上例の無いことなんだよ。異性の双子の間で結合双生児ができたのは。必ずといって良いほど同性間でしか起きない症例だったの

だ。それを君たちは覆した」

そして老人は、今後の医学界のためにも発表したかったと付け加えた。だが、患者のプライバシーのためにこの事は完全に伏せられる事となる。そして、せめてその姉の遺体は、後世の学問のために標本にしたいという願いだけは認められたという。

「それが……あの部屋にあったんだ」

呆然と翔太はつぶやいた。背中に冷たいものが走る。そして不気味な考えが脳裏に浮かんだ。

あの部屋で彼女は一人残されていた。何年も、何年も……翔太に一つしかない大切な脳を奪われて。ひょっとして姉さんは？

翔太は気になっていた疑問を院長にぶつけてみることにした。

「あとう、院長先生？」

「なんだい翔太君」

「先生のお話の途中から、気になっていたんですけど。父さんが姉さんにつけようとした名前って……？」

予想していた質問だったのか、老人は間髪いれずに答えた。

「明菜だよ。君のお父様はあの時お姉さんにつけられなかったその名を、きみの妹さんにつけたようだね。よほどお姉さんの事を気にかけていたのだろう」

やっぱりそうか。それが翔太の率直な感想だった。

「では、僕が会ったあの女の子……あきなという名前の人はひよつとして？」

震える声で翔太は尋ねた。

老人は少しだけ目を伏せたが、すぐに向き直り翔太にこう言う。

「私も信じたくはないし、認めたくもない。だけど……気になって仕方がないんだよ。ひよつとしてあの子は、双子の弟である君を呼んでいたのではなからうかと……」

「そんな」

そう答えた翔太であったが、身に覚えはありすぎるくらいにある。初めて会ったその日から、二人は息もぴったりで何をするにもうまがあつた。双子ならば当然のこと。

それに、翔太は何度も不可思議な病気や怪我に悩まされていた。そのたびにここに入院しては地下のあの部屋で彼女と会った。

確かに……彼女は呼んでいたのかもしれない。

だが、待てよ。

「そう言えば院長先生。僕は中学生になつてから今までは入院していませんでした。つまり彼女には会っていません。姉さんが僕を呼んでいたとしたら……それはどうしてなのでしょう？」

翔太の質問に老人は首を振った。

「実はな、君が中学生になるころ……あの標本は交流のあるとあるアメリカの大学研究室に貸し出されてたんだよ。珍しいものだから

とね。つい3ヶ月前に帰ってきたばかりだ」

「そうなんですか……その間、僕を傷つけ入院させなかったのは、傷つけても僕に会えないからだったんですね？　だとすれば、ちよつと優しい人ですよね」

翔太が笑って言った。重苦しい緊張感を少しでも払いたかったのだ。だが、院長の田中は笑うどころか沈痛な面持ちである。

「その代わり君のご両親は死んだ。ひよつとすると……」

「ま、まさかあ」

信じたくない。だが、姉にとって命を奪った憎むべき相手。もしかすると、もしかするかもしれない。

「今回の君の妹さん、明菜ちゃんの事で私は考えたんだ。もし君の姉さんの事がこの件に絡んでいるとすれば……あの標本の事も考えなきゃならんなど」

「考えるとは？」

怪訝な顔の翔太に病院長は答えた。

「きちんとお墓に埋葬しようと。お経をあげて弔おうとね」

「それはいい！」

翔太は叫んだ。いい考え。しかし、老人は悲しく頭を振る。

「それがだめなんだ」

「何故です？」

「昨日、地下のあの部屋に行ってみたんだが……どこにもないんだよ。君の姉さんの標本が」

二人の間に重苦しい空気が流れる。

だが、その時であった。

沈黙を破るように院長室に一人の看護婦が飛び込んできたのだ。彼女は息を切らしてこう言った。

「大変です、207号室の矢神さんが、目を覚ましました！」

第四章

看護婦のもたらした知らせを、翔太は初めすぐには理解できなかった。

（明菜が……目覚めただって？　どういうことだ）

脳の回転が鈍くなっているというか、ぼんやりと霞がかかっているというか……そんな感じであった。

まさかこのタイミングで明菜が目覚めるなんて、すぐに信じられる状態じゃなかったのだ。

今日は翔太の退院の日。明日からは明菜を院長に託して、暫く見舞いには来れないなと考えていた矢先の事なのである。なんとこのタイミングの良さ……

この3ヶ月一度も目覚めなかった眠り姫の魔法を、どんな王子様のキスで解いてあげたというのだろうか？　翔太にはまるで分からない。

いや、そもそも健康体の彼女が眠り続けていた事の方が、現代医学では説明のつかない謎だったわけだから、目覚めるのが自然と云えば自然である。

しかしだ……

地下室のあの幽霊、殺された結合双生児の片割れ、つまり翔太の双子の姉あきなが気にかかる。

こんなにあつさりと妹がよくなるなんて、意外としか言いようがない。姉の呪いは……もうとけたのだろうか？

まあ、両親によつて生きる望みを断たれた彼女の怨みも、実の妹にまでは完全に届かなかつたということなのかもしれない。

考えてみれば、姉の代わりに生を得た翔太はまだ生きているではないか。本来なら最も恨みまれて当然の彼。

ひよつとしたら姉さんは、ただ自分たち兄弟に会いたいだけで危害を加える気は無かつたのかもしれないな、と翔太は思う。

それなのにあの日、自分たちが逃げようとしたのでついカツとなつて明菜を……眠らせてしまった。こんな推理はどうだろうと翔太は考える。

いや、深読みしすぎか？ 翔太はさらに推理してみる。

それとも、幽霊なんてやつぱりいるはずもなく……全ては錯覚だったのかもしれない。

両親が突然の亡くなつた事も、翔太が奇妙な怪我や病気で入退院を繰り返した事も、地下室であの子に会つた事も純然たる偶然であり、そこには何ら非科学的な要素など含まれていないのだ。だから、どこも悪くない明菜が目覚めるのも必然。

兄と妹はこれまで通り、平穩に、幽霊なんかには怯えることなく仲良く暮らしていけるはず。

こちらの方が正解なのかも……いや、きっとそうだ。そうに違いない。

ついに翔太は結論に達した。

ならば、一刻も早く妹に会おう。会つて確かめるのだ！

こうして今、翔太は妹の目覚めを知らせにきた看護婦に先導され、明菜の病室へと急いでいる。

走るとまだ足が痛むが、今はそんなこと言つてられない。

一刻も早く彼女の無事を確かめたい。
懸命に妹の病室へと急ぐ。

明菜の部屋には5分もせずに着した。

いささか失礼とは思ったが、兄はノックもせずにドアを開け放つ。
兄と妹なのだ、こんな時に遠慮はいらないだろう。

すると、明菜の部屋からふわりと流れ出た冷たい空気が翔太の頬を撫でる。

人工的な冷氣である。ひやりとした感触が心地良い。

エアコンの効いた室内には数人の看護婦が、一人の女性入院患者と談笑していた。

ちょうど彼女は翔太に背中を向ける形で立っている。顔は見えない。

だが彼にはその後ろ姿で十分だった。

その女性は……長い眠りから目覚めた彼女、そう明菜だ！

談笑している彼女は、まるで健康な普通の少女のように見える。
3月も寝たきりだったとは信じられない回復ぶりだ。

ずいぶん髪が伸びていた。ショートカットの似合う快活な少女が、
こうしてみるとなかなかの淑女ではないか。

こっちの方がいいな。つい、そんな感想を抱いてしまう翔太。

その時、看護婦の一人が入り口で佇む翔太に気がついた。

「あら、明菜さん。お兄様がいらしたわよ」

その言葉に、それまで背を向けて立っていた彼女がくるりと振り

向く。

目と目で見つめ合う二人。間違いない明菜だ。彼女の瞳はうれしそうにはにんでいる。

本当に良かったと翔太は思う。

姉に呪われ一生目覚めないのではと、ついさっきまで心配していた自分が馬鹿らしい。まさに杞憂だった。

「明菜、もう良いのかい？」

兄が両頬にとびっきりのえくぼを作って笑いかける。母親ゆずりの笑顔。

そんな兄の言葉に、彼女は嬉しそうにうなずいた。

そして彼女もまた、そのほっぺたに可愛らしいえくぼをつくり微笑み返したのだ。

魅力的なその笑顔に翔太はドキリとさせられる。

何だろう、すっかり綺麗になった。まるで……あの子……いや、姉さんみたいに。

この時、翔太は忘れていた。妹がエアコンの冷気を嫌っていたこと。そして彼女はどんなに笑ったとしても、えくぼなどできない体質の女性であったことを。

大切な事なのに……

なぜか翔太は思い出せないでいる。

それよりも今は、この美しい妹から目をそらしたくない。そんな気分だった。

それは以前にも感じた事のある感情。懐かしのデジャブ。

そうだ、あれは4歳の頃の記憶。
一目で魂を奪われた初恋の思い出に近い。

いつの間にか……

翔太の瞳から生気が消えていた。
今の彼はまるで操り人形である。

変身を遂げた妹、明菜の意のままに動く時計仕掛けのマリオネット……ト

そんな翔太の様子に、彼女は満足したようにうなずいた。
そして意地悪そうな笑みを浮かべ、こうつぶやいたのである。

「うふふ、また会えたね翔太。もう二度とあなたを離さないわ。だってあなたは、私の大切な脳を持っている大事な弟なんだから。だから、それを返してもらうまでは……あたを生かしといてあげるわ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7133e/>

初恋

2010年12月1日10時39分発行